

スイング命のジャズ・ベースマン！

中村健吾

「スイングすること！ それと、人間としての素晴らしさ！！ やっぱそれは音に出るし、スイングするのと同じように大事なことですよね」と、55 RECORDS 代表取締役兼プロデューサー、五野洋氏が語る大坂生まれの New Yorker & 世界中で活躍する日本人ベーシスト、中村健吾の魅力。そして、その素顔に迫った！
(2006年9月6日 55 RECORDS にて) 取材 & 文：加瀬正之



♪ 新作『リガーディング・スタンダード』誕生秘話

ちょうど去年の春に「No Name Horses」という小曽根真さんのビッグバンドで日本に来た時に、その時のエンジニアがジョー・フアラさんという凄い方だったんですけど、レコーディングが終わって五野さんから「健吾、次のCDは僕に頼もう！」って言われたんです。でも、その時はまだ何をするか決まっていなくて、その後、ニューヨークで小曽根さんと僕とかみさんの3人で食事をした時に、小曽根さんから「次は何にするの？」って聞かれて、「何も考えてないんですよ」って応えただけです。それで、うちのかみさんが逆に「小曽根さんは4枚目何をやられたんですか？」って尋ねたら、小曽根さんから「僕はスタンダードをやった」って聞いて、その時にみんな「ピン！」と来たんですよ。これまでの3作品では、自分の音楽を皆さんに伝えたいと思って自分の曲を中心に作ってきたので、スタンダードを主にやることに逆にチャレンジングで面白いんじゃないかということと、このプロジェクトがどんどん形になっていったんです。

♪ 選曲について

今まで僕が演奏した中でメロディやコードが綺麗な曲の中から、自分の好きな曲ばかりを集めてみましたけど、「オール・ザ・ウェイ」という曲は、「この曲をマカス（トランプのマーク・スプリング）で聴きたいわ」っていううちのかみさんの意向で決めました。

♪ ニューヨーク（以下、NY）の名物フラット・アイアン・ビルをバツクにした中村さんの強い表情も印象的なジャケットですね！

これは五野さんが描いていたNYのタイムズ・スクエアで撮った写真真ビル・クロウ（b）のアルバム『さよならバードランド』でお馴染みのイメージを元に、僕とかみさんがNYの街を歩き回って、「NYだ！」って分りやすい所というところで、「グラント・セントル」・「フラット・アイアン・ビル」・「パブリック・ライブラリー」の3点に絞りましたが、一番キャッチャーな場所ということで、これに決めました。でも、実は撮影の前日にレコーディングが終わったばかりで、打ち上げもしていましたから、撮影当日は寝不足だったんですよ（笑）。

♪ 新作のメンバーについて

まず、前作と同じ「クインテット」でやるということとは決まっています。当初は、前作にも参加してくれたマカス・プリントップ（tp）とウエス・アンダーソン（as）が参加する予定だったんですけど、不運にもレコーディングの一週間前にウエスが入院してしましましたね。それで、いろいろ考えた末に、今マカスと一緒にリリカーン・センターでやっているテッド・ナッシュ（as, cl, a-fl）が良かったんです。ダン・マッソン（p）は、2-3年前から知っているんですけど、スイングすることにおいて凄く共通するところがあったので、彼に打診しました。彼はまだ23歳ですけど、若手では大有望株です。僕をずっと支え、見守ってくれていた小曽根さん（p, org）とは今回で4枚目になるんですけど、今回絶対にやりたかったオスカー・ピーターソンの「自由への賛歌」という曲があります。この曲で小曽根さんとデュエットしたくて、絶対にオルガンを弾いてもらおうって思っていました。そして、クラレンス・ペン（ds）とは、「No Name Horses」でも3曲一緒に演奏しているんですけど、いつか共演したいと思っていた僕の大好きなドラマだったんです。今回もこの最高のメンバーで、凄くいい化学反応が起きたと思います。

♪ ニューオリンズ縁のナンバーも収録されていますね

今年の春に仕事でニューオリンズに行きまして、その時に被害にあった現地を案内してもらったんですけど、実は今でも水が引いただけで、家屋がグシャグシャの状態がそのまま残っているんです。テレビではあまり放送されませんけど、その現実には凄くショックを受けまして、それで、その次の日にリリカーン・センター・ジャズ・オーケストラがコンゴ・スクエアという所で大きな復興のイベントをやったんです。僕もそれを見に行っていて、そのイベント終了後に地元のバスケットが街中をパレードしたんですが、僕達も彼等の後ろについてニューオリンズの街の中を歩いたんです。その時に人間の持つ凄くパワフルなエネルギーを感じまして、いつかこの街は絶対に復興するんだと思いながら、その時に感じたエネルギーをこの作品に入れたかったんです。あと、コンゴ・スクエアにはサッチモの銅像があって、「この素晴らしき世界」も今凄く聴いて欲しい曲だと思ってラストに入れました。このナンバーは映画の最後にクレジット・ロールが上がってくるようなあのイメージなんですよ。

♪ オリジナル・ナンバー「ステラ」と「ホープ」について

「ステラ」は、「ステラ・バイ・スター・ライト」という曲のコードを残して、新たに自分でメロディを作るという手法で作りました。僕の作曲の仕方はまずメロディからでなくて、コード進行ができた上でメロディを書くというのは僕にとって凄く難しい作業で、一日に1~2小節しかできなかったり、ちゃんと歌になるようにメロディを付けていくのに時間がかかりましたけど、苦労した分だけ思い入れのある曲です。昔のビ・バップの頃から取られている手法なんですけど、僕の好きなミソミソみたいなメロディをイメージして作りました。「ホープ」という曲は、2001年の世界貿易センタービルのテロ直後に作った曲で、2曲目の「セイ・ハロー・トゥー・セイ・グッドバイ」ではベース・ソロで演奏しているんですが、草の根運動ではないんですけど、あのテロから5年経って、改めてまたこのメッセージを僕達ミュージシャン・レベルからどんどん広げていきたいと思って再演しました。あの時は、僕の家の上をあの旅客機が飛んで行ったんですけど、テレビの前で魂を抜かれたみたいな状態でした。でも、その時に当時のNY市長のジュリアーニさんの「テロに負けずに、今までと同じように普通の生活に戻ろう」という言葉で気持ちを元に戻して、コード進行の流れとかメロディとかに自分の気持ちを入れて作った曲もあって、世の中の平和への願いやレクイエムの意味もあるんです。

♪ クラシック・ギターから始まった楽器運歴

最初は、フォーク・ギター少年になりたかったんですけど、でも、行ったギター教室の先生がたまたまクラシックの先生だったんです。その時は僕もフォーク・ギターとの違いを知らなくて、でも「これは違う。コードが逆でこないし、ピックで弾かないぞ」って思いながら仕方なく2-3年ほど習っていて、それからフォーク・ギターに持ち替えたんです。エレキ・ベースは高校に入ってから始めました。僕はファンクが大好きだったので、ブラジソン（＝ブラザーズ・ジョンソン）とかマカス・ミラーはよくコピーしていました。あと、ラリー・グラハムやルイス・ジョンソンとか、スラップの出だし頃の頃です。あの時は、ジャズなんか「何をやっているんだろう？」という感じで、カッコ良ささえ分かんなくて、「マイルスって誰？」って感じてたよ（笑）。アコースティック・ベースを始めたのはバークリー音楽院に入ってから

らで、元々ファンクのベーシストになりたくて入ったんですけど、チャールス・ミンガスに出会ってもの凄いショックを受けたことがきっかけで、どんどんジャズにのめり込んでいきました。

♪ **チャールス・ミンガスのどのアルバムに影響を受けたのですか**
『ミンガス・アー・アム』ですね。あれが僕を変えたアルバムです。でも実は、その前にビル・エヴァンス・トリオの『ワルツ・フォー・デビー』を買ってなんです。一曲目が「マイ・フォーリッシュ・ハート」で、あの曲で毎朝起きていたんで、あのアルバムも好きですね。スコット・ラファロのベースも素晴らしい、ああいふ風に弾いてみたかったんですけど、僕の血が騒いだのはミンガスのビートだったんです。

♪ **ミンガス以外に好きなベーシストを挙げるとすれば**

やっぱり、レイ・ブラウン、ポール・チェンバース、スコット・ラファロですね。あと、レジナルド・ウィールやクリスチャン・マクブライドの音なんかも凄く好きで、彼等が90年代の初めの頃にやっていった50年代の頃のスタイルに戻るといふサウンドは本当に凄かった！僕もちょうどその頃にNYに移って来て、あの頃はNYのジャズ・シーンが一番元気の良い時でしたね。

♪ **プロのジャズ・ベーシストとしての転機**

やっぱり僕の中では1998年にサイラス・チェストナウト(p)のトリオに入った時で、あの時にアメリカでプロとして旅をするということを実感しましたね。ひとつのバンドに入るっていうのはとても大切なことで、バンドとして固まるし、いろんな所にも行くし、あそこでいろいろな収穫を得ました。そして、その延長にあるのがウィントン・マルサリス(tp)との共演やリンカーン・センター・ジャズ・オーケストラへの参加だと思っています。

♪ **with ウィントン・マルサリス**

よく彼の家に行って一緒に練習させてもらいましたけど、やっぱりステージの上でいろいろ学ぶんですよ。どれくらいの音量で弾けばいいとか、どういうビートを出せばいいのかとか。やっぱり凄い人と一緒にやるといういろんなことを吸収しますし、自分で課題も分かりますからね。その中でも一番大切なことは、凄く抽象的なんですけど、どういう場面でもスイングすることですね。そして、いかにダイナミクスを付けられるか。基本的なことですけども、そういう面ではやはりウィントンとのステージではいろいろ学ばせてもらいました。

♪ **ベース・プレイに対するこだわり**

一番大切にしていることは、今そこに何が流れて、何が起きているかを的確に見て聴いて、それで自分の音を選んで、音楽として何を弾くかということです。それと、人と一緒に音楽をやっているわけなので、みんなと一緒に音楽を作っていくという姿勢ですね。あと、無理してベースの弦高を高くしたりするのではなくて、自分の手にあった弦高で、楽器も弾きやすくセッティングすることですね。

♪ **ジャズ・ベーシストとしての夢**

いつかは僕も大所帯(=ビッグバンド)でやりたいですね。小曽根さんのビッグバンドでやらせてもらっていますけど、自分の音楽がビッグバンドになったときの感激は大きいと思いますからね。

♪ **近い将来、作ってみたいと思うアルバムなどはありますか**

できたらいろんなデュオをやってみたいです。ベース&ピアノとか、ベース&ギターとか、前にチャーリー・ヘイデンがそういう作品を出しているんですけど、そういうデュオのアルバムって面白いかもしれないですね。

♪ **中村さんにとってジャズとは？**

僕の一番大切なものであり、僕が歩んできた人生でもあるし、僕の魂でもあると思います！

♪ **最後に“The Walker”読者にメッセージを頂きますか**

ジャズっていうのは、世代を通して知っているか知らないかんですよ。でも、やっぱりカッコ良くありたいですし、いろんな人に聴いてもらえるように数居をどう低くしていかなくてですけど、この『The Walker』を読んでもくれる人達が少しでも僕のCDを聴いてくれるように願っています。それがジャズの将来に繋がると 생각합니다からね。



写真：土居政則

【中村健吾 NY クインテット “Re : Standards” ツアー】

- 11/22 (水) 大阪 Jazz on Top (Tel. 06-6341-0147)
- 11/24 (金) 神戸 Satin Doll (Tel. 078-242-0100)
- 11/25 (土) 四日市 アソシエード第一 KAIEN'S ROOM (Tel. 059-323-1233)
- 11/27 (月) 京都 RAG (Tel. 075-255-7273)
- 11/28 (火) 横浜 Motion Blue (Tel. 045-226-1919)
- 11/29 (水) 名古屋 Doxy (Tel. 052-242-1227)
- 11/30 (木) 静岡 Koln (Tel. 0545-52-0468)
- 12/1 (金) 東京 Body & Soul (Tel. 03-5466-3348)
- 12/2 (土) 東京 Body & Soul
- 12/3 (日) 館林 文右衛門ホール (チケットぴあ：Pコード 242-537
Tel. 0570-02-9999)

メンバー：中村健吾 (b)、マーカス・プリンタップ (tp)、
ウェス・“ウオームダディ”・アンダーソン (as)、
海野雅威 (p)、高橋信之介 (ds)

(総合問合せ) 55 RECORDS Tel. 03-5785-2357

【中村健吾ウェブ・サイト (Kengo Nakamura Web Site)】
<http://www.kengonakamura.com/>

中村健吾、快心のスタンダード作品集！



リガーディング・スタンダード
中村健吾

4作目のリーダー・アルバム！

55 RECORDS: FNCJ-5518
¥2,500 (tax in)
2006.10.25 In Stores!

【P10のジャズ新譜紹介コーナーもご覧下さい】